

(一) まだ来ぬ秋

朝の突如の訪問か

微かに通り過ぎる風のように

秋の走りが

つま先立ちに通り抜けていった

早朝の短時間だけ

声を落として躡いて行った

そのすぐ後ろから

傍若無人に慣れ過ぎて

失礼も弁えぬ真夏日の奴目が

イヤーな響きで、

「悪いけれど、俺は未だ居るヨ」

襟首がじわっと汗ばんだ

僕は夢を見たのかもしれない

朝のささやかな冷気の中で

生き残りの老練な奴が

意地悪くじっと見つめていた

秋の走りは

先細りのネズミの尾のように

襖の隙間から消え失せた

天空にはギラギラと

夏が驕り高ぶっていた

(二〇一九年九月二〇日)